【33】所かわれば品かわる

もう４０年以上も昔のことになりますが、JICA（現、国際協力機構）の技術専門家として、中近東の今は戦乱で知られるシリアという国の首都ダマスカスで２年間暮らしたことがあります。
事前の情報も少なかったので、先入観や偏見を持って赴任したのですが、慣れてきて現地の事情や日常会話がわかるようになると、発展途上国であると思っていたシリアにも、日本とは異なった"進んでいる”現象がいくつもあることに気付かされました。
　そのいくつかを紹介します。

①超高層ビル
　勤務先のカウンターパートナーのお役人の自宅に夫婦で招かれ、出かけたらこれが新市街地にある 20～30 階建ての超高層ビルなのです。
　高さ 100m クラスのビルがいく棟も林立しているアパート街です。
　よく見ると建物の柱は細いし、壁は単なるブロック積で、耐力はなさそうで、耐震性は無いように思いましたが、日本最初の超高層ビル"霞ヶ関ビルディング“が出来てわずか 10 年後というのに、中近東の小国に超高層ビルが、しかもオフィスでなく人の住むアパートなのです。今日の日本のタワーマンションの先駆けですね。

②女性アナウンサー
　テレビを視てすぐ気づいたのは、ニュース番組を女性アナウンサーが一人で堂々と放送していることです。
　日本では今考えると信じられないでしょうが、当時お堅いニュース番組は男性アナウンサーが、女性アナウンサーが登場しても男性と同席でした。
　女性が人前で顔をさらすのは御法度のイスラム教の国と思っていた私には意外でした。
　その女性アナウンサーは派手な風貌の現代的な美人なのです。
　その一方で違う場面では、黒づくめのイスラム教の坊さんが、顔にたかってくるハエをピシャピシャ叩きながらコーランを唱えていました。

③無電柱の市街
　シリアはかってフランスの植民地だったので、ダマスカス市街はロータリーの多いフランス風の街づくりなのですが、電柱が見られません。
これは東京より進歩していると感心したのです。
　ある時、自宅の電話の声が小さくなって聞こえにくくなりました。
　役所の同僚にこぼすと、雨が降ると電流が漏れて通話の音量が下がる地域があるとのことです。
　シリアの季候は、基本的には乾燥国で年間降水量 180mm くらい、それも主として冬季に降りますが、久々の降雨で地下埋設の電線の絶縁性が低下するらしいのです。
道路の掘り返し工事の現場を見て納得しました。

日本のような共同電線溝（これは現在の事ですが）に収めるのでなく、普通の電線が乾いた浅い地中にそのまんま埋められているのです。
乾燥国ならではのやり方なのでしょうが、電話はともかく電力の方は事故にならないのか心配になりました。

④マイクロバスによる地域交通サービス
シリアには古い幹線鉄道を別にして鉄道網がありません。
従って中心都市と郊外の町や農村地域を結ぶマイクロバスによる輸送が発達していました。
ダマスカス市にも大きなバスセンターがあり、普通の大型バスに混じって、そこら中からマイクロバスがアリのように集まってきてそれは壮観という眺めです。
個人タクシーのように個人経営のようで、外国人には言葉がわからないと乗りにくいのですが、慣れれば便利な存在で、時々利用させてもらいました。

⑤深夜営業の薬局
シリアは完全な医療分業だったので薬屋さんの存在は重要ですが、ある深夜、子供が熱を出してどうしても鎮痛剤が欲しいとタクシーの運転手に尋ねたところ、開いている薬局に連れて行ってくれました。
ダマスカスでは夜通し開店している薬局が当番制で決まっていて、開いている店の一覧表がどの薬局の前にも張ってあるとのことでした。
その国、その民族の街や社会そして生活様式は、その土地の自然とそこに住む人々の歴史と習慣のつみ重ねの上に出来たものであり、どこの国のやり方が優れているとか進んでいるとかいうものではありません。
発展途上国なんてレッテルを張られたのは、たまたま現代技術文明と経済発展に乗り遅れただけの話なのです。

“所変われば品変わる”ということわざを文字通り痛感しました。